

佳作

中学校、陸上部としての最後の夏

青森県弘前市立南中学校

3年 八木橋 颯

気付けば、1年生からずっと続けてきた陸上部としての活動もゴールが見え始めていた。

中学校に入学し、小学校にはなかった部活動に入部することがワクワクしてたまらなかった。小学生のころ、部活動について考えていたときにふと、テレビや動画で見た陸上が頭に浮かんだ。セットの合図で構え、「パンッ」と会場中に響く銃声と同時にスタートし、競り合いながら走り抜いていく姿を思い出し、憧れを感じた。

「陸上部に入りたい。」

いつの間にか親にそうねだっていた。世界の舞台には立てずとも、速いスピードで走りたいと思っていた。親も反対はせずに、「覚悟をもって、3年間続けるなら」と許可してくれた。決まったときの喜びは今でも忘れられない。

絶対に速くなれるように、自分が憧れていたものに少しでも近づけるように頑張った。ぼくは、短距離、主に100メートルをやることにした。入部してまず、基礎となる動きを学んだ。速く走るために、ハードルドリルや流し、マーカー走などをただひたすらやった。まだ1年生で体力もなく、すぐに息があがったり、きついと弱音を吐いたりすることも多くあった。でも、速く走りたいという思いや、隣で頑張る仲間のおかげでなんとか乗り切ることができた。冬の部活はさらにきついメニューだった。廊下をひたすら往復する往復走や、筋肉をつけるための腕立て伏せや、いろいろな型の腹筋など、ほとんど毎日のようにやった。このとき初めて、速くなるのは簡単ではないと実感した。あきらめてしまおうかと思う日もあったけれど、自分より速い友達が食いしばって走っているのを見て、もっと頑張ろうと思えた。

2年生では、初めて県大会に行くことができた。個人の種目ではなかったが、リレーで出ることができた。初めて中に入った競技場はいつも練習している競技場よりも何倍も大きく感じたし、360度観客席があったし、むわっとして変なおいがしたのを覚えている。予選で負けてしまったが、とてもいい経験だった。またここに来て走り、表彰台にのぼりたいと思う気持ちも大きくなった。最後の新人戦で県大会に行けるように、さらに励んだ。種目を今までより距離の長い400メートルに変え、リレーも質を上げられるようにした。何としても県大会に行きたいと走りこみ、400メートルで出場を決めた。試合でもいい走

りができた。次々と2年生の大会が終わり、冬になった。1年生のときより、長い距離での往復走、十数種目のトレーニングを3～5セット行うサーキットなど、昨年よりもきついメニューを死ぬ気でやった。仲間との差を感じる瞬間もあったが、折れずにやり遂げた。

最後の中体連、種目を100メートルに戻した。リレーも走ることができた。地区大会の100メートルの予選、自分のレーンに立ったとき、今まで陸上部員として走ってきたことが頭に浮かんできた。うれしかったときもあったし、つらいときもあった。でも、続けてこられた。今までやってきたことに自信を持って、自分を鼓舞しながらセットし、スタート。ギリギリで何とか決勝に行けた。リレーは不安なく、冷静にスタートし、バトンもつながり、決勝を決めた。100メートルの決勝では、絶対に県の競技場で走るという決意を思い出し、思いきり走ったが、7位で県大会を逃した。「全てを出す」とはこういうことだと感じることができた。リレーは今までで一番の走りができ、1位で県大会に行くことができた。

県大会出場が決まり、リレーだけに専念して練習した。次の走者の仲間と何回も何回もバトン合わせをして、完璧にできるように練習した。だが、あまり調子があがらず、うまくバトンが渡らないことが目立つようになった。あせりもあって当日に近づくにつれてミスが多くなった。大会前日、先生にもっとコミュニケーションを取るようにと指導され、そのときできるベストを尽くせるように、たくさんメンバーと話し合った。当日もみんなで話し合い、確認し合った。もやもやしていたものがなくなり、自信を持てた。スタート位置に向かうとき、1年間に感じた五感の全てがよみがえり、より気合いが入った。冷静さを保つようにして、確実に、速くバトンを渡せるように全力で走った。今までで一番本気で走ったが、惜しくも負けてしまった。ただ、とても満足のいく走りだった。

今年の夏は、今まで積み重ねてきたことを信じて挑むことや、支えてもらっていることに対する感謝、つらいことでも継続して努力した先に見られる景色を体験できた。憧れていたものにまた一步近づけたような気がする。